

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

学生のSNS 利用頻度とアカデミック・スキルの習熟度の関連

著者	黒河内 利臣
雑誌名	The Basis : 武蔵野大学教養教育リサーチセンター 紀要
号	7
ページ	93-104
発行年	2017-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00000507/

学生の SNS 利用頻度とアカデミック・スキルの習熟度の関連

黒河内 利臣

はじめに

先行報告（黒河内 2016）では、学生による自己評価をもとにしたアカデミック・スキルの習熟度をコンピュータの利用頻度別に分析した。本稿では、コンピュータの利用頻度別ではなく、スマートフォンの利用頻度別の分析をおこなう。具体的には、先行報告での検討をベースに、学生の SNS（Social Networking Service）の利用頻度とアカデミック・スキルの習熟度との関連性について検討をおこなう。

1. 問題意識と分析方法

1.1. 問題意識

本稿では、アカデミック・スキルの習熟度の分析を、黒河内（2016）による報告（以下、「先行報告」と表記する）でおこなったコンピュータの利用頻度別ではなく、スマートフォンの利用頻度別におこなう。

スマートフォンの利用頻度別の分析をおこなうのは、ここ最近の大学1年生（2016年4月に浪人せずに現役生として入学した学生は1997年度生まれ）は「ネオ・デジタルネイティブ」と呼ばれる世代だからである。「ネオ・デジタルネイティブ」とは、特に1996年前後に生まれた世代をさして「モバイルでネットを駆使して、動画情報をも自由に操る若者」（橋元 2010、p.110）とされている。つまり、「Windows95」や「Windows98」が搭載された家庭用のパーソナル・コンピュータとインターネット環境が一般家庭に普及し始めた頃に生まれ、物心ついた頃には光回線などのブロードバンド（高速インターネット通信）環境が整っている世代ということになる。さらにいえば、この世代はそれ以前の世代と異なり、コンピュータよりも携帯端末を利用してインターネット上のさまざまなサービスを享受する世代ということでもある。

しかし、本稿が依拠するアンケート調査がアカデミック・スキルの習熟度を確認するためのものであり、学生のスマートフォン利用について明らかにすることを目的とした調査ではないことから、スマートフォンの利用頻度別の分析をおこなうにしても、その利用動向の詳細な分析はできないというデータの制約がある。ただし、後述のように、受講生は SNS の利用にほとんどの場合でスマートフォンを利用することが確認されていることから、もっとも端的なスマートフォンの利用方法のひとつとしての SNS の利用頻度をスマートフォンの利用頻度とみなすことは可能である。

そして、そもそも、スマートフォンの利用頻度とアカデミック・スキルの習熟度との関連性を明らかにする理由として、次のことが考えられる。近年の情報通信環境の拡充をみれ

ば、日常生活への活用、特に情報検索や情報の閲覧程度ならばコンピュータが必要なく、手近なスマートフォンで済むのが実情であることから、先行報告で示された高い習熟度が利用端末によるものなのかを見極める必要がある。

たしかに、先行報告では全体的に高い習熟度が示されていた。そして同時に、コンピュータの利用頻度別にみたときに、利用目的を問わず、高頻度群の方が低頻度群よりも習熟度の自己評価が高いことも示されていた。レポート作成やプレゼンテーションの資料作成などの大学での学習活動の場面ではスマートフォンよりもコンピュータの方が優れているし、実際には一般的にもコンピュータを利用する場合の方が多いと思われる。この点で、学習目的にコンピュータを利用する学生の方が習熟度が高いのは自然である。

また、コンピュータの使用頻度の高頻度群よりも低頻度群の方が「コンピュータを学習目的でのみ利用する」傾向がみられたことから、学生はコンピュータを学習目的の道具と認識していると推察される。後述するように、学生がSNSを利用するさいには、コンピュータではなくスマートフォン等の携帯端末を利用する傾向もみられる。そして、学習活動でも同様に、レポート作成やプレゼンテーションの資料作成の準備などで必要な情報検索ならば、コンピュータではなくスマートフォンでも可能である。このように、プライベートではコンピュータよりもスマートフォンを使うことを前提としても特段の問題が生じないことになる。そして、学生の考え方として「コンピュータは学習目的に利用する」ものであり、学習目的以外にも利用する場合があるのはコンピュータに慣れている学生のみということになる。しかし、コンピュータの利用頻度による習熟度の差異は解消したい。

そこで、本稿ではスマートフォンの利用頻度とアカデミック・スキルの習熟度の関連性について分析する。具体的には、先行報告で示されたアカデミック・スキルの習熟度の差異は利用端末の種類によるものなのか、それとも種類を問わずこのような情報端末そのものの利用頻度によるものなのかを明らかにする。そして、本稿が下敷きにする先行報告の問題意識、つまり「初年次教育の目標にてらせば、事前の学力、知識・技能の習熟度や学習への意欲などとは関係なく、大学での学習を円滑に進めるために必要な知識や技能としてのアカデミック・スキルの学習を取り入れ、かつ一定の習熟が期待される」（黒河内 2016、p.123 抜粋）ために、本稿での考察を初年次教育の成功のための一助としたい。

1.2. 分析の視点

上記の問題意識をもとに、2015年度の1年次のコンピュータ基礎科目において、受講して身につくと思われる学生の知識や技能（アカデミック・スキル）の習熟度の自己評価を受講生にたずねたアンケートの結果を用いて分析をおこなう。

その分析にあたり、先行報告ではコンピュータの利用頻度別に分析をおこなった。本報告では、情報端末の種類としてコンピュータではなくスマートフォンの利用頻度別の分析をおこなう。そして、上述のように、スマートフォンの利用頻度をSNSの利用頻度で代用し、主な4つのSNS（Twitter、Facebook、LINE、Instagram¹⁾）の利用頻度と利用端末についての質問の結果と、アカデミック・スキル17項目（表1）の習熟度についての質問の結果を用いて、両者の関連を確認する。

なお、本報告では先行報告で用いた 2014 年度の結果ではなく 2015 年度の結果を中心に報告をおこなう。これは、2015 年度も 2014 年度と同様に「身についた」と考える学生の割合（習熟度）が高いことと、差異がみられたとしても何らかの理由があるとは考えづらいためである²⁾。

表 1 本科目で身につくと思われる知識や技術（黒河内 2016、再掲）

(1) コンピュータ操作全般
(2) キーボードを利用したタイピング
(3) レポート作成に必要なワープロソフトの操作
(4) ワープロソフトで文書を編集すること
(5) 表計算ソフトを利用して合計値や平均値を算出すること
(6) 表計算ソフトを利用して簡単なデータの集計をすること
(7) プレゼンテーションソフトで発表内容をまとめること
(8) 趣味や日常生活での情報検索
(9) レポートに作成必要な情報検索
(10) レポート作成に必要な文献・論文を検索すること
(11) 文献・論文の読解力
(12) レポートに必要な文章作成の能力
(13) 数値の読解（数値に示された現象を読みとること）
(14) レポート作成についてのモラル・マナー全般
(15) メール利用（送信）時のマナー
(16) インターネット利用時のモラル・マナー
(17) 学習活動の場面で必要なモラルやマナー、著作権の知識

1.3. 分析に用いるアンケートの概要

本稿で分析に用いる薬学部 1 年生対象のコンピュータ科目（以下、「本科目」と表記する）の受講者を対象にしたアンケートの概要と内容は、科目の概要と学習内容も含めて、いずれも先行報告で分析に用いたものと同一である³⁾。アンケートの実施時期も本科目の前期開始時（2015 年度回収数 145 部、この調査結果を「前期開始時」と表記する）と後期終了時（同 139 部、この調査結果を「後期終了時」と表記する）は同じである。本稿では、いずれにも回答がある 138 名を対象に分析をおこなう。

そして、本報告で特に用いるのは、SNS の利用頻度と本科目で学習可能なアカデミック・スキル 17 項目（表 1）の習熟度について回答してもらったものである。具体的には、アカデミック・スキル 17 項目それぞれについて「後期終了時点で『身についた』と思うか」の質問への回答をもとにする。そして、後述の分析で「身についた」割合としたものは、この質問の回答（4 件法：「かなり身についた」「少し身についた」「あまり身につかなかった」「全然身につかなかった」）のうち「かなり身についた」と「少し身についた」の回答人数を合計したものである。

2. アンケートの結果

2.1. 学生のコンピュータと SNS の利用頻度

2.1.1 コンピュータ所有率と利用状況

それでは、SNS の利用頻度の確認の前に、自宅でのコンピュータの所有状況と利用頻度についてみておこう。ここでは、2015 年度受講生の情報端末の利用環境について確認し、先行報告での 2014 年度受講生との違いを概観する。

まず、ほとんどの学生が、家族との共用も含めて自宅にコンピュータがあるとしている（表 2）。特に、2014 年度と比較して 2015 年度に顕著に違うのは、後期終了時点でほとんどの学生が「自分専用のものがある」としていることである（2014 年度 78.8%、2015 年度 90.6%）。

表 2 自宅でのコンピュータの所有状況

	2014 年度		2015 年度	
	前期開始時	後期終了時	前期開始時	後期終了時
自宅にはない	3.4	0.7	2.9	1.4
自分は使えないが、家族がもっている	---	---	---	---
自分専用のものはないが、家族と共用のものがある	31.5	20.5	23.9	8.0
自分専用のものがある	65.1	78.8	73.2	90.6
合計	100.0	100.0	100.0	100.0
N（人）	146		138	

単位：%

そして、前期開始時点での自分専用の情報端末の所有状況については（表 3）、コンピュータ所有者は 2015 年度（82.6%：「Windows コンピュータ」76.1% + 「Macintosh コンピュータ」6.5%）の方が 2014 年度よりも増加している（70.6%：同 65.8% + 4.8%）。一方、本稿で注目する「スマートフォン」については兩年ともにほとんどの学生が所有している（2014 年度 93.8%、2015 年度 95.7%）。

表 3 所有している自分専用の情報端末（前期開始時、複数回答）

	2014 年度	2015 年度
Windows コンピュータ	65.8	76.1
Macintosh コンピュータ	4.8	6.5
携帯電話（従来型の“ガラケー”）	12.3	7.2
スマートフォン（iPhone、Android など）	93.8	95.7
タブレット端末（iPad など）	16.4	18.1
電子書籍閲覧端末（Kindle、kobo など）	2.1	2.9
その他情報端末	1.4	3.6
N（人）	146	138

単位：%

また、自宅でのコンピュータの利用状況については（表4）、1週間のうち定期的に使う習慣があるような高頻度で使う学生は、後期終了時点で2015年度（69.5%：「週2～3日程度」39.1%＋「ほぼ毎日」23.2%＋「毎日必ず」7.2%）は2014年度（75.3%：同39.7%＋24.0%＋11.6%）よりも5ポイント程度減少している。もっとも、7割程度の学生が自宅でも高頻度でコンピュータを利用していることがわかる。

表4 自宅でのコンピュータの利用状況

	2014年度		2015年度	
	前期開始時	後期終了時	前期開始時	後期終了時
自宅にパソコンはない	2.7	0.7	1.4	---
自宅にパソコンはあるが、自分はまったく使わない	3.4	4.1	6.5	2.9
ほとんど使わない（週1日程度）	30.8	19.9	29.0	27.5
週2～3日程度	19.9	39.7	23.2	39.1
ほぼ毎日	33.6	24.0	27.5	23.2
毎日必ず	9.6	11.6	12.3	7.2
合計	100.0	100.0	100.0	100.0
N（人）	146		138	

単位：%

これらの結果をまとめると、本科目の受講生については、2014年度と比較すると2015年度の方が、自宅でも自分で自由にコンピュータを利用できる状況にあるものの、コンピュータの利用頻度は低下していることになる。もちろん、この結果は局所的なものであるし、コンピュータの利用頻度が低下したことと、スマートフォンの利用頻度が高まることは等価ではないものの、スマートフォンを利用する余地が増えていることは推察される。

2.1.2. SNS アカウント所有率と利用端末

次に、後期終了時点での主な4つのSNSの利用頻度（アカウント取得率）と利用端末についてみてみよう（表5）。ここでは主に2015年度の結果を中心にみていくが、上述のInstagramの例のように、SNSの利用動向は短期間で変化することがあるので、2014年度の結果も掲載する。

2015年度の「利用頻度」でのアカウント取得率（表中「アカウントあり」⁴⁾）をみると、ほとんどの学生がTwitter（87.7%）とLINE（99.3%）を利用しているのに対し、Facebookは3分の1（33.3%）にとどまる。また、Instagramが半数弱にとどまるのは、前三者と比較すると後発のSNSであるためと思われるが、「アカウントあり」の割合が2015年度（47.1%）は2014年度（34.2%）と比較すると増加している。このInstagramについては、2014年から2015年にかけて学生だけでなく一般的にも利用者が倍増したという報告もあり⁵⁾、これからさらに増加するものと思われる。

次に、利用頻度をみてみよう。ここでは、「ほぼ毎日」と「毎日必ず」と回答した学生を「高頻度群」、それよりも利用頻度の低い学生を「低頻度群」とまとめた。その結果、「高頻度群」はLINEがほぼ全員（97.1%）、Twitterは4分の3程度（76.8%）となった。また、

2014年度と2015年度とで比較すると、Facebook 以外の3つのSNSで「高頻度群」が増加している。

最後に、利用端末については、多くの学生が利用しているLINEとTwitterは、「主に携帯」としている学生が多い（LINE：88.4%、Twitter：73.9%）。Instagramについても学生全体では44.2%ではあるものの、アカウント取得者の中ではほとんどが「主に携帯」としていることがわかる。

これらのことから、学生は主にLINEとTwitterをスマートフォンで、かつ高い頻度で利用していることがわかる。Instagramについても利用者はまだ半数弱ではあるものの、アカウント取得者のほとんどはスマートフォンを利用していることがわかる。学生にとり、SNSはスマートフォンを使って高頻度で利用するものであることが確認された。

表5 SNSアカウント所有率と利用端末（後期終了時点）

		Twitter		LINE		Facebook		Instagram	
		2014年度	2015年度	2014年度	2015年度	2014年度	2015年度	2014年度	2015年度
利用頻度	アカウントなし	14.4	12.3	---	0.7	65.8	66.7	65.8	52.9
	アカウントあり	85.6	87.7	100.0	99.3	34.2	33.3	34.2	47.1
	低頻度群	16.4	10.9	6.2	2.2	22.6	28.3	14.4	18.8
	1ヶ月に1回程度	5.5	4.3	0.7	---	11.0	15.9	3.4	9.4
	1週間に1回程度	4.8	1.4	0.7	---	4.1	5.8	2.7	2.9
	1週間に数回程度	6.2	5.1	4.8	2.2	7.5	6.5	8.2	6.5
	高頻度群	69.2	76.8	93.8	97.1	11.6	5.1	19.9	28.3
	ほぼ毎日	28.1	29.7	28.8	23.2	7.5	5.1	7.5	13.8
	毎日必ず	41.1	47.1	65.1	73.9	4.1	---	12.3	14.5
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
利用端末	アカウントなし	14.4	13.0	---	0.7	64.4	65.2	64.4	52.2
	アカウントあり	85.6	87.0	100.0	99.3	35.6	34.8	35.6	47.8
	主にパソコン	0.7	2.9	---	0.7	2.1	0.7	---	1.4
	主に携帯	76.0	73.9	91.8	88.4	29.5	29.0	35.6	44.2
	パソコンと携帯両方	6.8	10.1	5.5	10.1	2.7	3.6	---	1.4
	その他端末	2.1	---	2.7	---	1.4	1.4	---	0.7
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
N（人）		146	138	146	138	146	138	146	138

単位：%

2.1.3. SNS 利用頻度

そこで、SNSの利用頻度の変化についてみてみよう。ここでは利用者の多かったTwitterとLINEに限定し、2015年度の前期開始時と後期終了時との間での利用頻度の増減の傾向をみることにする。なお、利用頻度については上述の基準をもとに「低頻度」と「高頻度」とに簡略化し、前期から後期にかけてのその頻度の変化を4群にわけて集計した（表6）。

その結果、TwitterとLINEのいずれでも「変化なし（高頻度）」（Twitter：62.3%、LINE：94.2%）が最多で、「増加」も含めると、多くの学生が後期終了時点には高頻度でこれらのSNSを利用していることがわかる。そして同時に、前節での結果もふまえると、SNSを高頻度で利用するということは、スマートフォンを高頻度で利用しているだけでなく、スマートフォンの利用頻度も増加しているということにもなる。

表 6 前期から後期にかけての SNS 利用頻度の変化 (Twitter)

	Twitter	LINE	説明 (後期終了時点で前期開始時と比較して)
増加	14.5	2.9	利用頻度が「低頻度」から「高頻度」に増加した学生
変化なし(高頻度)	62.3	94.2	利用頻度が「高頻度」で変わらない学生
変化なし(低頻度)	18.1	2.2	利用頻度が「低頻度」で変わらない学生
減少	5.1	0.7	利用頻度が「高頻度」から「低頻度」に減少した学生
合計	100.0	100.0	

N=138、単位%

2.1.4. コンピュータと SNS の利用頻度のまとめ

ここまで、学生のコンピュータの所有状況と利用頻度を確認した。その結果、多くの学生の自宅には学生自身が利用可能なコンピュータがあり、7割程度の学生は自宅でも高頻度でコンピュータを利用してはいるものの、スマートフォンを利用する余地が増えていることもうかがえた。また、SNS については、LINE はほぼ全学生、Twitter は 7～8 割の学生が、いずれもスマートフォンで、しかも高頻度で利用していることも確認された。

2.2. SNS 利用頻度別アカデミック・スキル習熟度

ここまでの確認をふまえて、SNS の利用頻度別 (「高頻度群」と「低頻度群」) にアカデミック・スキルの習熟度をみていく。その SNS の利用頻度別の分析にあたり、ここでは Twitter の利用頻度を指標とする。Twitter に限定するのは以下の理由による。第一に、LINE はほぼ全員が「高頻度群」、その逆に Facebook は多くが「低頻度群」なので、これらの SNS の利用頻度をもとに分析することはできない。そこで第二に、Twitter か Instagram のどちらかになるが、Instagram は上述のようにアカウント取得率が半数弱にとどまっていることと、Instagram は画像投稿中心で直感的に情報発信ができるのに対して Twitter は 140 字の制限があるとはいえ、伝えたい情報を文字にまとめるという点では学習場面に比較的近い要素がある。また第三に、集計表は掲載しないが、Instagram の利用頻度別に Twitter の利用頻度をみたところ、Instagram アカウント所有者 (65 人) のほとんど (58 人、89.2%) が Twitter も高頻度で利用しており、Instagram 利用者には SNS の利用頻度にも大きな偏りがみられる。

このため、以下では Twitter の「高頻度群」と「低頻度群」別に、アカデミック・スキルの習熟度をみることにする。

表 7 は後期終了時点で「身についた」、「特に身についた」、「さらに学びたい」と、それぞれ回答された割合を、全体 (138 人)、「Twitter 高頻度群」(106 人) と「Twitter 低頻度群」(32 人) とわけてまとめたものである。

まず、「身についた」とする割合からみてみよう。受講の結果、ほとんどの項目で 80% 以上の学生が「身についた」としている。そして、「低頻度群」と「高頻度群」との間に統計的有意差 (5% 水準) が確認されたのは「(10) 情報検索 (文献・論文検索)」のみではあるものの、多くの項目で「低頻度群」と「高頻度群」とで「身についた」とする割合の差が 5

ポイント以上みられるだけでなく、「(3) ワープロソフト (レポート作成)」以外の全項目で「高頻度群」の方が「身についた」とする割合が高い。

次に、「特に身についた」知識や技能について回答されたものをみてみよう。全体で回答の多かった項目のうち2つ (「(5) 表計算ソフト (簡単な計算)」と「(6) 表計算ソフト (簡単な集計)」) は先行報告と同じ結果で、これは後期科目で表計算ソフトを用いた学習が主だった影響があると思われる。また、「低頻度群」と「高頻度群」との比較で両者の間に5ポイント以上の開きがみられた項目は3つだけである。この3つのうち「(4) ワープロソフト (文書編集)」(高頻度群 5.7%、低頻度群回答なし)、「(5) 表計算ソフト (簡単な計算)」(同 24.5%、12.5%) で、「高頻度群」の方が情報をまとめるための知識や技能に対して「特に身についた」という実感をもっている。もうひとつの「(10) 情報検索 (文献・論文検索)」(同 0.9%、12.5%) については、「高頻度群」の回答がほぼなかった。また一方では、「(2) タイピング」は「高頻度群」(15.1%) も「低頻度群」(18.8%) も回答割合が多く、受講生全体の割合で 2014 年度 (9.6%) と比較しても 2015 年度 (15.9%) は増加している。もちろん、この2年での比較は局所的な結果に過ぎない可能性はあるものの、コンピュータのキーボードを利用したタイピングに不慣れな学生が増加していることをうかがわせる。

表7 アカデミック・スキル17項目習熟度の自己評価 (Twitter 利用頻度別、後期終了時)

	身についた			特に身についた			さらに学びたい		
	全体	高頻度群	低頻度群	全体	高頻度群	低頻度群	全体	高頻度群	低頻度群
(1) コンピュータ操作全般	98.6	99.1	96.9	5.8	5.7	6.3	6.5	5.7	9.4
(2) タイピング	93.5	95.3	87.5	15.9	15.1	18.8	4.3	5.7	---
(3) ワープロソフト (レポート作成)	97.8	97.2	100.0	5.1	4.7	6.3	0.7	0.9	---
(4) ワープロソフト (文書編集)	97.8	99.1	93.8	4.3	5.7	---	1.4	0.9	3.1
(5) 表計算ソフト (簡単な計算)	97.8	98.1	96.9	21.7	24.5	12.5	2.2	2.8	---
(6) 表計算ソフト (簡単な集計)	94.2	96.2	87.5	18.8	19.8	15.6	18.1	15.1	28.1
(7) プレゼンテーションソフト	89.1	91.5	81.3	2.2	1.9	3.1	6.5	4.7	12.5
(8) 情報検索 (私用目的)	84.8	87.7	75.0	---	---	---	1.4	0.9	3.1
(9) 情報検索 (学習目的)	87.0	89.6	78.1	2.9	2.8	3.1	5.1	5.7	3.1
(10) 情報検索 (文献・論文検索)	84.8	88.7	71.9	3.6	0.9	12.5	7.2	8.5	3.1
(11) 文献読解力	68.8	69.8	65.6	0.7	---	3.1	10.1	10.4	9.4
(12) 文章作成能力	68.8	70.8	62.5	4.3	3.8	6.3	23.9	26.4	15.6
(13) 数値の読解	83.3	85.8	75.0	---	---	---	2.9	2.8	3.1
(14) モラル・マナー (レポート作成)	92.8	94.3	87.5	3.6	4.7	---	2.9	3.8	---
(15) モラル・マナー (メール利用時)	96.4	97.2	93.8	10.1	9.4	12.5	1.4	---	6.3
(16) モラル・マナー (インターネット利用)	87.7	89.6	81.3	0.7	0.9	---	1.4	1.9	---
(17) モラル・マナー (学習場面)	94.9	96.2	90.6	---	---	---	3.6	3.8	3.1
				100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

N : 全体 138 人、高頻度群 106 人、低頻度群 32 人

単位 : %

表注 :

① (1)~(17) のアカデミック・スキル名称 : 表1の表現を簡略化したもの

②後期終了時に、身についた : 「身についた」(「かなり身についた」 + 「少し身についた」) とした割合

特に身についた : 「特に身についた」とした割合 (単一解答)

さらに学びたい : 「さらに学びたかった」とした割合 (単一解答)

最後に、「さらに学びたい」とした上位3項目は、その回答割合の多い順に「(12) 文章作成能力」(23.9%)、「(6) 表計算ソフト(簡単な集計)」(18.1%)、「(11) 文献読解力」(10.1%)となった。このうち、「(12) 文章作成能力」(高頻度群 26.4%、低頻度群 15.6%)と「(6) 表計算ソフト(簡単な集計)」(同 15.1%、28.1%)は「高頻度群」と「低頻度群」との間に10ポイント以上の開きがみられた。このほか、回答割合は多くないものの一定数の回答がみられたものとして、「(7) プレゼンテーションソフト」については5ポイント以上の開きがみられた(同 4.7%、12.5%)。一方、上述の「(11) 文献読解力」(同 10.4%、9.4%)については両者の間に開きがみられなかった。いずれも、情報をまとめたり編集したりするような知識や技能への関心が高いことがわかるが、比較的「低頻度群」の方が「高頻度群」よりもコンピュータの操作技術に関する知識や技能に関心がとどまり、「高頻度群」の方が「文章作成能力」というコンピュータ科目では直接学べない知識や技能に関心が向いていることがわかる。

2.3. SNS 利用頻度別アカデミック・スキル習熟度のまとめ

ここまでみたように、学生の主観的な自己評価ではあるものの、アカデミック・スキルの習熟度はおおむね高いものであることが確認された。そして、SNS (Twitter) の利用頻度をスマートフォンの利用頻度とみなして、その「高頻度群」と「低頻度群」とで習熟度を比較すると、多くの項目で「高頻度群」の方が「身についた」とする割合が高いことが確認された。

また、「特に身についた」とする項目や「さらに学びたい」とする項目をみると、「低頻度群」の方が「高頻度群」よりもコンピュータの操作技術に関する知識や技能に関心がとどまる傾向が比較的強く、「高頻度群」の方が「文章作成能力」というコンピュータ科目では直接学べない知識や技能に関心が向いていることがわかる。

これらの結果は、スマートフォンの利用頻度別ではなくコンピュータの利用頻度別にみた先行報告でも同様である。具体的には、コンピュータやスマートフォンの利用頻度が高い学生の方が利用頻度の低い学生よりも習熟度が高く、かつ、高頻度群の方がコンピュータ科目においてコンピュータ操作にとどまらないような、レポート作成などの知識や技能の習熟への期待もみられた。

したがって、利用端末によるアカデミック・スキルの習熟度の差異は、少なくとも今回の分析から確認されなかったことになる。これは同時に、利用端末にかかわらずその利用頻度が高い学生の方が、アカデミック・スキルの習熟度は高いということでもある。

3. まとめと今後の課題

3.1. 本稿での知見

本稿では、初年次のコンピュータの基礎的な学習をおこなう科目にアカデミック・スキルの学習を取り入れた結果、コンピュータではなくスマートフォンの利用頻度別に習熟度によりアカデミック・スキルの習熟度に差異がみられるかを確認した。

まず、ここまでの主な知見として、具体的には以下の5点を示すことができる。

①先行報告での2014年度と比較すると、2015年度の方が自宅でも自分で自由にコンピュータを利用できる状況にあるものの、コンピュータの利用頻度は低下している。一方、ほとんどの学生がスマートフォンを所有している。そして、多くの学生がスマートフォンでSNSを高頻度で利用している。

②SNSの利用頻度をスマートフォンの利用頻度とみなし、その利用頻度別に習熟度をみると、多くの項目で「低頻度群」と「高頻度群」とで「身についた」とする割合の差が5ポイント以上みられるだけでなく、ほとんどの知識や技能で「高頻度群」の方が「身についた」とする割合が高い。

③「特に身についた」とする項目や「さらに学びたい」とする知識や技能では、「低頻度群」の方が「高頻度群」よりもコンピュータの操作技術に関する知識や技能に関心がとどまり、「高頻度群」の方がコンピュータ科目では直接学べない知識や技能に関心が向いている。

④つまり、スマートフォンの利用頻度が高い学生の方が利用頻度の低い学生よりも習熟度が高く、かつ、高頻度で利用する学生の方がコンピュータ科目においてコンピュータ操作にとどまらないような、レポート作成などの知識や技能の習熟への期待もみられた。

⑤スマートフォンの利用頻度により、アカデミック・スキルの習熟度に差異は生じない。先行報告のコンピュータの利用頻度別の分析とあわせると、習熟度の差異は利用するコンピュータやスマートフォンなどの端末の利用頻度の差異や端末の種類によるものではないということがわかる。

3.2. 知見をふまえた考察

これらの知見を総合すると、スマートフォンというプライベートに利用しやすいツールであるにもかかわらず、その利用頻度が高い方が低い方と比較して習熟度が高いという結果になった。つまり、学習目的に使われるコンピュータや、プライベート目的に使われるスマートフォンのどちらを利用していても、利用頻度の高い学生の方が高い習熟度を示したことになる。

それでは、学習目的に利用するツールであるコンピュータの利用頻度が高い方がアカデミック・スキルの習熟度が高いのは必然としても、プライベート目的に利用されがちなスマートフォンでも同様の傾向がみられるのはなぜか。

コンピュータの利用頻度別にTwitterの利用頻度をみると(表8)、Twitterの「高頻度群」はコンピュータ利用の「低頻度群」(76.2%)と「高頻度群」(77.1%)とでほぼ同じ割合となっており、コンピュータの利用頻度が高い学生ほどTwitter、さらにはスマートフォンの利用頻度が高まるということでもない。つまり、コンピュータを利用する頻度とスマートフォンを利用する頻度との間には明確な因果関係がみられないということになる。「スマートフォンからのインターネット利用はパソコンからのインターネット利用を代替えるものではなく、両者は状況に応じた補完関係にあるか、スマートフォンに付加効果をもつ」(松田2011、p.110)可能性を指摘するものもあり、学生にとってコンピュータとスマートフォンは利用目的が異なるツールとみなされていると推察できる。すると、習熟度の差異はコンピュータも含めた情報端末全般を利用する機会の差異ということにもなる。

表 8 コンピュータの利用頻度× Twitter の利用頻度 (後期終了時)

		Twitter 利用		合計	
		低頻度	高頻度	割合	N (人)
コンピュータ利用	低頻度	23.8	76.2	100.0	42
	高頻度	22.9	77.1	100.0	96
	全体	23.2	76.8	100.0	138

単位：%

3.3. 初年次教育への課題

最後に、本稿の知見をふまえた初年次教育への課題を二点示しておこう。

第一に、コンピュータの活用方法の学習と実践する機会を担保することがある。スマートフォンの利用頻度別の習熟度と、コンピュータの利用頻度別の習熟度が同様に高かったからといって、コンピュータの授業が不要ということではない。そもそもスマートフォンの利用頻度を高めることがアカデミック・スキルの習熟度を高めることになるということではない。上述のように、特に学習場面ではスマートフォンにはコンピュータを補完する役割があるに過ぎないからである。たとえば、通常の教室でグループワーク等をおこなう際に、情報検索のためにスマートフォンを利用させることはできても、それ自体は学習成果を高めるきっかけにすぎないため、スマートフォンだけで学習成果を高められると考えるのは早計である。レポート作成やプレゼンテーションの資料作成にはコンピュータを利用するのが実情であることから、むしろコンピュータを利用しない学生に向けて、コンピュータの活用方法の学習と実践する機会を担保する必要がある。

第二に、初年次教育の目標として「事前の学力、知識・技能の習熟度や学習への意欲などとは関係なく、最終的に大学での学習に適応できること」、つまりさまざまな差異を解消することがある。つまり、初年次教育には大学生の知識や技能の習熟度を一定にする目的があるとするとすれば、上述のように、習熟度の差異は情報端末全般を利用する機会の差異ともいえることから、学生（家庭）の経済的事情によらず習熟の機会を担保する方策を考える必要がある。大学での学習にはスマートフォンだけでなく、コンピュータの利用も必要であるとするならば、たとえば、自宅で利用するためのコンピュータを購入できない学生への金銭的な補助や在学期間中のレンタル契約等の方法は検討されてよい。ただし、この点は本稿が依拠するアンケート調査からは検討することができず、今後の検討課題としたい。

註

- 1) Instagram (インスタグラム)：写真共有、投稿サイト。Twitter や Facebook などの文字での投稿が主の SNS とは異なり、Instagram はスマートフォンなどで撮影した画像等をアプリを通じて加工、投稿することができる。
- 2) 割合を詳細にみれば、後期終了時点での習熟度の自己評価には、2014 年度と 2015 年度とで数ポイント程度の違いがみられる項目もある。たとえば、「特に身についた」項目で両年度の結果

に5ポイント以上の違いがみられたものには、「(2) タイピング」(2014年度9.6%、2015年度15.9%)、「(15) モラル・マナー (メール利用時)」(同19.2%、10.1%)がある。このほか、「身についた」とするものでは「(6) 表計算ソフト (簡単な集計)」(同87.0%、94.2%)、「(7) プレゼンテーションソフト」(同93.8%、89.1%)、「(8) 情報検索 (私用目的)」(同91.1%、84.8%)、「(9) 情報検索 (学習目的)」(同93.8%、87.0%)、「(10) 情報検索 (文献・論文検索)」(91.8%、84.8%)、「(12) 文章作成能力」(76.7%、68.8%)があり、特に、必要な情報を探してまとめるときに必要な知識・技能が「身についた」とする割合が低下している。理由として、筆者個人の印象にすぎないが、2015年度の受講生はプレゼンテーションやレポート等の課題に必要な情報を探すのに苦労していた。これは単に、その年度の受講生の特徴にすぎない可能性もあり、詳細な理由は検討できない。

- 3) この科目の概要と学習内容、およびこのアンケートの概要は、先行報告(黒河内2016)に詳しいのでそちらを参照されたい。
- 4) 表中「利用頻度」と「利用端末」とで「アカウントなし」の割合がわずかに異なるのは、「利用頻度」と「利用端末」をたずねた質問でそれぞれ「アカウントなし」という選択肢を設けたためであるが、おおまかな傾向の確認は可能である。
- 5) アメリカフェイスブック日本法人によれば、「Instagram」の日本の月間利用者数が1年前の2倍の810万人(6月時点)に増えたという(日本経済新聞2015年10月2日付の記事より)。

参考文献・資料一覧

- 橋元良明、(株)電通、電通総研、奥律哉、長尾嘉英、庄野徹(2010)『ネオ・デジタルネイティブの誕生 日本独自の進化を遂げるネット世代』ダイヤモンド社
- 黒河内利臣(2016)「大学初年次のコンピュータ基礎科目におけるアカデミック・スキルの習熟度」『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis』第6号、pp.123-139
- 松田美佐(2011)「大学生のスマートフォン利用」『中央大学社会科学研究所年報』第16号、pp.99-112
- 『日本経済新聞』2015年10月2日付朝刊